

MIS036-P121

会場:コンベンションホール

時間:5月27日 14:15-16:15

東北地方太平洋沖地震による津波についての広域現地調査 北海道から岩手県の太平洋岸

Preliminary result of field survey on the 2011 Tohoku earthquake tsunami along the Pacific coast of Hokkaido

西村 裕一^{1*}, 中村有吾¹, 伊尾木圭衣¹, プルナ プトラ¹, アディティア グスマン¹

Yuichi Nishimura^{1*}, Yugo Nakamura¹, Ioki Kei¹, Purna Putra¹, Aditya Gusman¹

¹ 北海道大学

¹Hokkaido University

2011年3月11日の東北地方太平洋沖地震により発生した津波は、東北地方のみならず日本各地に広がり大きな被害をもたらした。津波の高さや遡上範囲は、全国の研究機関等の研究者らにより結成された東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループにより効率的に行われている。我々は、このグループの活動の一環として北海道から岩手県にかけての太平洋岸で調査を実施した。北海道の調査は、津波注意報が解除された3月14日の朝から、また東北地方の調査は3月27日から実施した。調査は北海道43カ所、東北地方36カ所で行った。津波の浸水高や遡上高、遡上範囲は、港や集落では建物に残されたウォーターマーク、自然海岸では木々の枝折れや枝上に残された浮遊物、地表の侵食範囲や浮遊物帯を根拠にして求め、できるだけ複数の根拠から津波の陸上での挙動を理解することに努めた。その結果、北海道の太平洋岸では根室から函館の広い範囲に渡って2-4mであったこと、津波は襟裳岬周辺で特に大きく、場所によっては5-6mに達していたことがわかった。また東北地方では、青森県の三沢海岸で5-10m、宮古市周辺では30mを越える場所もあった。津波の高さは、防波堤で囲まれた港の内部に比べると、外洋に面した自然海岸では約1.5倍程度であることも確認された。三陸海岸特有の深い谷地形では、20-30mの津波が谷の両側斜面と底部を侵食し、場所によっては1km以上奥まで侵入していた。三沢海岸や三陸海岸では、津波の挙動と津波による地表浸食や堆積物の特徴との関係にも着目して調査を行った。

キーワード: 東北津波, 津波痕跡, 津波堆積物, 遡上高, 浸水高

Keywords: Tohoku tsunami, tsunami evidence, tsunami deposit, runup height, flow height